

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32619
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：18H03451
研究課題名（和文）東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリバース・イノベーションによる発信

研究課題名（英文）Regeneration of Dwelling Culture and Cultural Landscape of the Waterfront Village in Southeast Asia and Dissemination of the Method through Reverse Innovation

研究代表者
清水 郁郎（Ikuro, SHIMIZU）
芝浦工業大学・建築学部・教授

研究者番号：70424918
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,100,000円

研究成果の概要（和文）：東南アジア大陸部水域集落における自然・人・物の相互環を、居住文化や景観を手がかりに解明してきた本研究だが、研究対象地としたタイのアユタヤ、メーチェム、ラオスのルアンパバーンとパクセでは、共通して従来の水域と人の関係が大きく変容していた。生業転換や耕作放棄、耕作物の変化などはその地でも進んでおり、今後どのように土地利用や河川利用に波及するかみていかなければならないだろう。いっぽうで、物質文化や生態系からなる景観については、人々の心性、とくに宗教や信仰に関わる霊性が景観創出の鍵となるとの知見を得た。景観の再生には、こうした心性をどのように持続できるかが鍵になる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自然や生態系を基盤とする景観をどのように次の世代に継承していくのかは、世界的に喫緊の課題だが、本研究の対象地でもあった水域では、大規模な開発や環境変化により、豊かな景観や居住文化は急速に失われている。本研究では、モンスーン気候によって極めて湿潤度が高く、また、古来より河川と人々の豊穡な文化的関係が構築されていた東南アジア大陸部において、その現在の様態を明らかにし、また、その持続と再生には物質的開発に加えていかに精神性を持続できるかが鍵になることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has elucidated the interconnectedness between nature, people, and material culture in waterfront communities in mainland Southeast Asia using housing and residential cultures and landscapes as clues, but in Ayutthaya, Mae Chaem in Thailand, and Luang Prabang and Pakse in Laos, the relationship between conventional affinity water and people has changed significantly. Livelihood conversion, abandonment of cultivation, and changes in cultivated crops are progressing in every region, and it will be necessary to see how it will spread to land use and river use in the future. On the other hand, with regard to landscapes consisting of material culture and ecosystems, we found that people's mentality, especially spirituality related to religion and belief, is the key to landscape creation. The key to landscape regeneration is how to sustain this mentality.

研究分野：建築学、文化人類学、建築人類学

キーワード：東南アジア 水辺集落 居住文化 景観 リバース・イノベーション 物質文化 霊的景観 生態系

1. 研究開始当初の背景

東南アジアのタイ、ラオスの主要河川流域にある水辺集落では、人々は水上住居、杭上住居、高床住居に住み、生業も水域の生態環境を基盤として営まれてきた。両国では、今日、水域の豊かな文化的多様性や居住文化の文化遺産化に向けた取り組みが進むが、一方で、生態環境利用や生業の変化によりその多様性は急速に失われ、均質化が進む。

代表者は、東南アジアにおけるこれまでの科研費研究などにより、居住文化は個人や集団の歴史や知識を伝えてきたこと、住居建設時の労働交換や住居を舞台にした儀礼や祭礼を通して、人々は自身の社会的存在意義を追認することを確認してきた。さらに、多民族国家のタイやラオスにおいて、固有の居住文化は個別社会の実存的根拠にもなっていた。住居や住まい方は、利便性や快適性の向上を目指して常に変化するが、物質としての変化は表面的でも培われてきた慣習や知識の多くも同時に失われることが多い。それは、アイデンティティや文化の基層の喪失にもつながる。今日、両国の水辺集落をこうした視点で見た時、驚くべき速さでそれらが実際に起きており、まずは居住文化や生態と物質からなる景観の維持、保存が必要だと考えるに至った。

いっぽうで、両国には、伝統的住居や景観を自力で維持したり、再生したりしようと地道な努力を続けている水辺集落もある。それらの集落では、居住文化を背後から支える生態系を丹念に手入れし、また、水域との緊密な関係を個人ではなく集落全体で保つ工夫や仕組みがある。本研究は、それらを抽出し、整理することで、水域に親和した居住文化の実態を明らかにし、さらに居住文化や景観を維持保存するだけでなく、それらの変化や喪失を経験した水辺集落にも適応可能な再生手法になり得ると着想するに至った。

2. 研究の目的

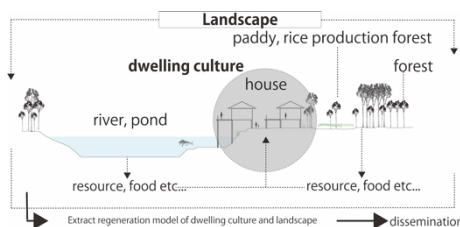


図 1 研究スキーム

本研究は、河川や湖沼と密接な関係を持ち、固有の伝統的木造建築や景観を保持する複数の水辺集落で、それらを今日まで繰り返し再生してきた方法を把握する。具体的には、住居と水域の関係、生態環境や水域の利用に関わる慣習的知識、住居建設と生態資源管理に持続的かつ複雑に関与する社会的紐帯や職能を把握し、水域と親和性の強い文化の持続・再生の実態を究明する。また、居住文化や景観がどのように変化し、喪失するのかを、物質的、社会経済的側面から追求する。それらの分析から、居住文化と景観の再生

手法を検討し、リバース・イノベーション概念を援用して両国の水辺集落に適応可能な再生モデルを考案する。各集落の持続・再生手法を他の水辺集落に適用できるように整備、発信し、再生を促すことで、両国の文化的多様性の維持に貢献する。

リバース・イノベーションは、新興国で生まれた技術革新や新興国市場向けに開発した製品、経営アイデアを先進国に導入して世界に普及させる概念である（ゴビンダラジャン, B. & トリンブル, C. ダイヤモンド社『リバース・イノベーション』2012）。本研究ではこれを地方集落と国家の関係に読み替え、各集落で生まれた居住文化と景観を再生する手法を、多様な方法で社会に発信し、居住文化の変化や喪失を経験した水辺集落に適用し、再生につなげることを目指す。

3. 研究の方法



図 2 研究対象地

本研究では、建築学と人文科学の学際的、領域融合的研究を実施した。建築物や景観、生活空間の物質的、物理的様態を、実測やドローンを使った広域地図の作成等により把握し、いっぽうで、集約的かつ微視的フィールドワークを実施し、民族誌的資料を収集した。スケールの異なる研究方法を駆使して資料を収集、統合し、水域の居住文化・景観の特質を探った。

研究対象地域は、タイのアユタヤ県バンバーン郡、チェンマイ県メーチェム郡、ラオスのルアンパバーン県ナムバク郡、そしてチャンパサック県コーン郡である。

調査対象は、アユタヤではチャオプラヤ川、メーチェムではピン川に注ぐメーチェム川の支流レーク川、ナムバク郡ではウー川、コーン郡ではメコン川流域に立地する河川との関わりが濃密な集落である。これらの集落で、以下の諸点について資料を収集した。

- (1) 生態環境・資源と水域利用の実態把握および慣習的知識・手法の微視的把握
 - ① 木造伝統住居を詳細に記録し、住居に関わる自然資源を同定し、一棟の住居に必要な数量や単価を調べ、資源利用をまとめたデータシートを作成する。
 - ② その自然資源が建築材料として現在も利用可能か否かを把握し、可能なら自生量や栽培量を把握し、自生地や栽培地を GIS 地図上に蓄積する。将来的な利用可能性も評価する。
 - ③ 生態環境から産出される建築部材以外の資源の衣食住における利活用の実態を把握する。
 - ④ 自然資源、森林や河川、湖沼などを維持管理する慣習的知識と手法を把握し、記録する。

- (2) 居住文化と景観の維持保存、再生に関する社会的紐帯や職能の把握
 - ① 大工や生業（農業、漁業、家畜飼養、綿織物生産）に関する職能を把握する。
 - ② 労働交換や相互扶助、関連する儀礼行為、儀礼集団との関係を把握する。
 - ③ 上記各事項が変化、喪失し、居住文化や景観に波及するインパクトを、インタビューや実測を通して明らかにする。
- (3) 居住文化と景観の再生システムの考案と発信
 - ① 上記①②で把握した各要素間の複合的関係を、生態資源の管理と維持、生業と水域との関係、人的・社会的システムの観点から読み解く。
 - ② 居住文化や景観の変化や喪失の理由を、物質的、社会経済的側面、生態環境の変化から追求し、どのような方策で再生的変化を起こせるのかを検討する。

4. 研究成果

(1) 居住文化と景観の把握および水域居住の現在

各研究対象地で得た資料に基づいて、ここでは居住文化と景観の実態および水域居住の現在の様態を記述する。

① 河川氾濫の常襲地アユタヤにおける居住文化と景観

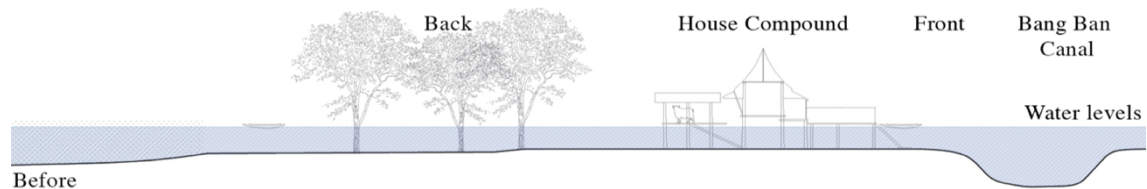


図 3 冠水時のアユタヤのモデル図

タイ中部のアユタヤはチャオプラヤー川沿いの水濠都市として中世から栄えたアユタヤ王国の旧王都で、かつての王都周辺に散在する集落の間を多数の運河が流れ、タイでも有数の稲作地帯である。対象集落も水辺に立地し、河川の氾濫に対応しながら水と親和性の高い居住文化を維持してきた。集落に沿って運河が流れ、毎年雨期になると洪水が発生する。冠水は9月前後に始まり、長ければ3ヶ月程度続く。運河からの冠水は屋敷地を超えて水田まで至り、稲の生育に利用される。伝統的生業は水稻耕作を中心とする農耕である。従来、5月から10月まで続く雨季に稲を栽培していたが、現在は二期作で乾季にも栽培する。農耕のほかに、雨季の水田漁撈、運河での漁撈、水田と屋敷地の間に繁茂する森で森林資源の収穫などを行う。森の樹木は薪としても利用されていた。住居は地盤面から床下までの高さが2メートルを越える高床式で、雨季の生態環境に完全に調和する。

集落では、土地や住居を女性が継承し、姉妹の世帯にそれぞれの夫が入り、1つの屋敷地の中で複数の世帯が暮らす屋敷地共有集団を組織している。舟運が主要な移動手段であった他に、雨季に冠水した際の集落内の移動にも利用されていた。河岸には屋敷地共有集団ごとの船着き場があり、住居は正面を運河に向けていた。屋敷地の中では、住居の周辺に菜園、果樹園が配され、さらに屋敷地の向こう側には世帯が所有する森があり、その背後に世帯の水田が広がっていた。伝統的集落の景観は、運河側から、運河－菜園・果樹園－住居－菜園・果樹園－森－水田の順に組織されていた。

1970年、政府により集落の外環を通る新しい道路が敷設されたが、その道路は既存の土地よりも高く敷設されたために、雨季に水田が冠水するのを妨げることとなった。そのために、水田に導水する新たな水路が必要になった。また、新道ができたことで交通手段は船から車に急速に変化し、それに伴い住居正面が運河側から道路側が変わった。

さらに、運河の水量を調節するために建造された水門の建設後、乾季にも生育の早い品種改良稲の栽培が可能になったが、新しい品種の栽培に対応できない住民は離農することになった。国中で600万ヘクタール以上が浸水した2011年の大洪水後で伝統的な栽培稲が死滅し、政府から品種改良稲が配給された際にも、新しい農法に適応できない者の離農が相次いだ。不要になった水田は、バンコクの土壌会社に売却され、その会社は水田の地下に埋まる良質な土砂を土木等の事業に売り払った。そのために水田には多くの穴（サンドピット）が空き、現在では水が溜まり、水田として利用不可能となっている。



図 4 景観の構成モデル

② 重力灌漑が生み出すメーチェムの景観

タイ北部チェンマイ県のメーチェム郡は、タイの最高峰インタノン山の山裾に位置し、郡中心



図 5 集落の断面モデル

部はチェム川が形成した盆地に立地し、盆地周辺は森林で覆われている。700 年以上前から堰と用水路による河川がかりの重力灌漑が発達し、灌漑の補修や水利をめぐる組織される社会集団も存在する。山間盆地の雨季の稲作は、北タイに 19 世紀末まで存続したランナー・タイ王国の生産基盤でもあった。重力灌漑や棚田が卓越した村 N は、山地の谷を流れるレーク川沿いに広がり、北タイ人住民の 80 から 90%が農業に従事し、稲作をおこなっている。

地形の傾斜による河川水流は複数の堰で分枝して農地全体に行き渡る。ムアン・ファーイと呼ばれるこの灌漑は、運河に竹材を打ち込み石や竹の葉で堰をつくる仕組みで、竹や石の隙間を縫って砂や泥、魚が移動できるために、水量以外の変化はもたらさない。

断面を見ると、レーク川を基点として上流の堰から引かれた水流が斜面を流れる。左手はおもにキャベツ、スイートコーン、ピーナッツ、ガーリック、果物などの畑で、右手は棚田状の水田である。住居群は左手農地を超えた上方にあり、その間を車道が走る。車道の向こうは急峻な森となっている。このように、ムアン・ファーイを含んだ独特の景観がみられる。

重力灌漑の井堰と水路を保守し、修復を行う集団が、長年組織されてきた。ひとつの河川には複数の堰が設けられ、堰ごとにその管理と保守を集団の長、副長、そして構成員が担う。構成員数は 20 から 100 人と多様で、各集団では、年に 2 回、雨季前（5 月または 6 月）と乾季前に灌漑の清掃や補修作業を行う。

③ 生業と一体化したルアンパバーンの文化的景観

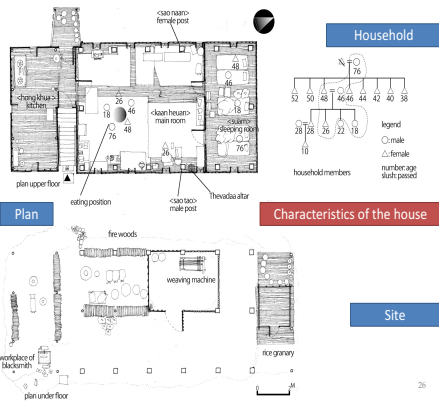


図 6 住居とその住まい方

ラオスのルアンパバーン県ナムバク郡のルーの村落 N では、綿織物生産と居住空間の親密かつインタラクティブな関係がみられる。

住居屋内は一室空間で、奥側に壁をもうけ寝室とし、階段のある手前側が別棟の炊事棟になっている。屋内手前側が食事場所、奥側の寝室手前の壁際が接客場所となっている。床下は薪やオートバイ、農耕具、漁撈具などの物置となっている他、鍛冶や竹細工づくりの作業場でもある。さらに、機織り機が置かれ、世帯の女性の仕事場となる。床上入り口の向かいには、水仕事を行う竹の露台がある。

N 村では元来水稲農業が生業だったが、近年、水田や森林をバナナやゴムのプランテーションとして外国企業に売却するようになった。こうした生業転換により農業収入が減少する一方で、綿織物の重要性は徐々に大きくなった。各世帯では、綿花栽培から製糸までの全工程を行う。また、95%の世帯で機織り機を一台以上所有する。

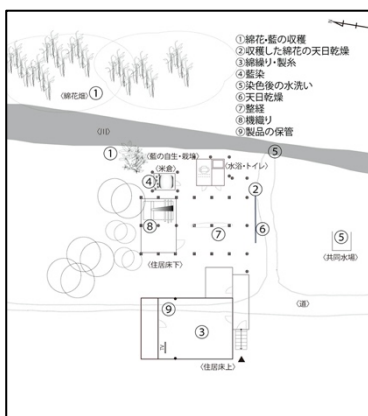


図 7 綿織物の工程と空間

④ メコン川中洲島の居住文化と景観

国際河川メコンはラオスと隣国タイとの国境線だが、ラオス最南部のカンボジアと国境を接するあたりでは川幅が百メートル以上にもなる。その川中に数多くの島ができており、古来、人々が住み着いた。中洲島で最大のコーン島はフランス植民地時代に行政府が置かれて以来、地域の拠点となっており、現在もコーン郡庁が置かれている。フランスにより敷設された車道が島全体に行き渡り、現在では大陸部と橋でつながっている。同島南部の H 村が研究対象地である。

H村の起源はこの地に先住していたクメール人とされ、その遺構の建築物の柱が残されており、現在では人々の信仰対象となっている。

H村の住民はタイ系集団に属するラオ族である。タイ系集団は一般に母系社会を組織するが、H村も同様で、女系親族が土地を共有して暮らす屋敷地共有集団を組織する。家産は女性の資産であることが多い。

河川流域に立地するH村の伝統的住居は木造の高床式である。住居の方位観も河川と関わり、屋根の棟は川の流れに概ね平行である。新築する際に最初に立てる柱には、足もとに石を置き、草花で飾って、土地にまつわる守り神を祀る。村の景観は、メコン川から集落の後背地までシームレスにつながっており、内陸の最深部には墓地やそれを囲む保護林、クメール時代の遺構があり、続いて農地、幹線道路、集落、川という構成になっている。

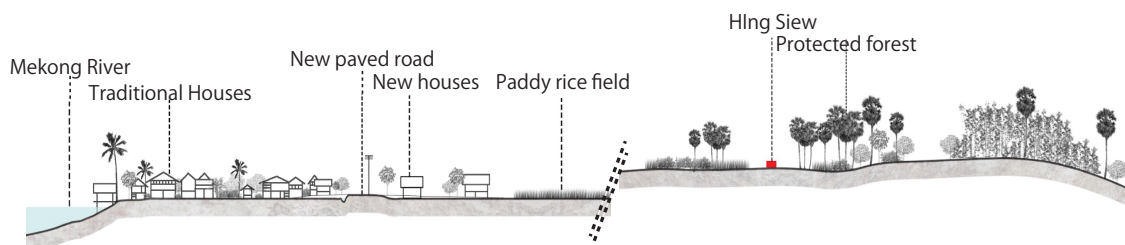


図 8 河川から内陸部にシームレスに続く景観

(2) 物質文化と心性の混淆からなる景観の様態

上記④のチャンパサック県における研究では、生態系・精神性・物質世界の相互環として景観を捉えることで、景観と個人や集団、社会とのあいだの持続的作用を把握することができるとの着想を得た。それは、物質性の背後にある人間の精神が景観創出にいかに関わるのかを示すものであり、物質性を基軸とする現在の景観評価に対しても批判的視点をもたらす。本研究では、とくに、人間が自然や生態系と呼応する中で獲得した「霊性」によって景観が創出されるとの視座の下、霊性が宗教実践や慣習的行為、物質を通して可視化され、どのように景観として立ち現れるのかを探求し、異種混淆からなる「霊的景観」について検討した。

対象とした集落 N では、ある種の悪霊の厄払いが頻繁に行われ、その際に人工的構築物や自然地形、生態系が儀礼の重要な鍵となる。N は一見、典型的な南ラオスの集落だが、ラオスや同じ文化圏にある東北タイで今日でも存在すると考えられるその悪霊を浄化することができる唯一の集落である。本研究期間中にこの浄化儀礼の参与観察を行い、その際に、儀礼の過程で水が浄化において主要な役割を持つことがわかった。この儀礼には、3ヶ所でそれぞれに異なる水が関与し、ひとつは「除霊小屋」の床下に集められたクライアントに床上からかけられる水で、次はそれに隣接し、クライアントたちが飛び込む池であり、最後はやはりクライアントたちが身体を洗うメコン川である。

小屋で人々かけられる水は、霊媒によって作られた聖水で、霊媒に憑依し、悪霊を駆逐する霊的存在の霊力が混入したものである。次に、人々は池に飛び込み、全身を池の水につけるが、この池の水中には霊的障害を取り除く特別な木が生えておりと考えられており、それゆえに池の水は強い力を持つ。最後に、人々は、メコン川で自らの身体を洗い、悪霊を水流に流す。水は、他地域でもしばしば浄化儀礼の際に用いられるが、水流は上位と下位の概念を持ち、下位は冥界や霊的存在の帰る場所と解釈されることは、民族誌でもたびたび描かれる。この研究事例では、浄化儀礼の実践を通して人工的構築物、自然、生態環境がそれぞれの役割と固有の意味を持つことが明らかになる。

(3) リバース・イノベーションの方策

タイとラオスの複数の研究対象地において、水辺集落の居住文化、景観の変化とそれらを維持する鍵について研究を進めてきた。いずれの研究対象地でも、居住文化と景観の衰退や変化が見られたが、とくにアユタヤやルアンパバーンでみられたように、生業転換が景観を大きく変える基点になることがわかった。また、メーチェムの事例では、生業と関わって創出される景観を維持する社会集団の存在が、居住文化や景観の持続に重要であることがわかった。さらに、ルアンパバーンの事例からは、生業転換後も、代替となる生業を活性化することで、既存の居住文化や景観を維持できることがわかった。今後はこうした知見を踏まえて、生業変化がもたらす居住文化と景観の変化をどのように最小化し、あるいは持続させられるかを検討していくことが必要になる。

いっぽう、景観の創出の背後には、人間の心性や精神性が深く関与しており、そうした局面をどのように把握して景観が固有のものとして現前するのかを、引き続き探求する必要がある。これらの点を踏まえて、同地域での新たな研究の展開を構想していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 YODSURANG Patiphol、UEKITA Yasufumi、SHIMIZU Ikuro	4. 巻 5
2. 論文標題 Water-Based Settlement and the Loss of Community Water Resilience	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Interiority	6. 最初と最後の頁 179, 196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7454/in.v5i2.210	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Ikuro SHIMIZU	4. 巻 -
2. 論文標題 The New Normal in Peripheral Societies in Southeast Asia, An Attempt to Extend the Range of Focus in Architecture	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the 13th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA)	6. 最初と最後の頁 515, 519
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 周縁社会のニューノーマル タイのフィールドにおけるフィールドワーク拡張の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年度日本建築学会大会（北海道）建築計画委員会オーガナイズドセッション 建築フィールドワークの拡張 ニューノーマルにおける居住文化の再構築を新たな方法で捉える『2022年度大会学術講演梗概集（北海道）』	6. 最初と最後の頁 795, 798
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 人間と集団の可能態	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 魅力ある住宅地と伴走する人々 - コロナ禍で見えた集住の価値 - 2021年度日本建築学会大会（東海）建築計画部門研究懇談会資料	6. 最初と最後の頁 8, 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 なぜスラムは改善されないのか？タイ、バンコクのクロントーイを事例に考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都市インフォーマリティから導く実践計画理論 2021年度日本建築学会大会（東海）[若手奨励]特別研究部門パネルディスカッション資料	6. 最初と最後の頁 118, 119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takuya ABE, Ikuro SHIMIZU	4. 巻 4
2. 論文標題 Mutual relationship between taboo of faith and house space: A case study of "licit architecture" in 70 Rai, Khlong Toei, slum improvement project area, Bangkok, Thailand	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW	6. 最初と最後の頁 565 ~ 574
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12242	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 霊的景観 ラオス深南部の水辺集落で生きられる霊的世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民俗建築学会2021 年度公開シンポジウム『信仰と環境 - 日常の住環境にみられる霊的な場 - 』	6. 最初と最後の頁 7, 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 東南アジア大陸部社会における自然・人・物の相互環 山地と水域における文化的景観の考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 出ユーラシア・プロジェクト第5集 2020年度研究活動報告書	6. 最初と最後の頁 103, 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 86
2. 論文標題 河合洋尚著 『 < 客家空間 > の生産 梅県における「原郷」創出の民族誌』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 145 ~ 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.86.1_145	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 東南アジア大陸部水辺集落における生態環境・人・物の相互環 とくに生業からみた文化的景観の組織と物質文化の特性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 出ユーラシアの統合的人類史学 文明創出メカニズムの解明 2019年度研究活動報告	6. 最初と最後の頁 59, 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wittaya DAUNGTHIMA, Ikuro SHIMIZU	4. 巻 -
2. 論文標題 Learning process that promotes the design of spatial layout together through real experiences	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Built Environment Research Associates Conference	6. 最初と最後の頁 749-755
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 清水郁郎	4. 巻 -
2. 論文標題 北タイのエコミュージアム活動から考える現代のフィールドワーク Re-discovery and Reconstruction of the Housing and Dwelling Culture by Fieldwork	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集 (北陸)	6. 最初と最後の頁 1097-1100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ABE Takuya、SHIMIZU Ikuro	4. 巻 84
2. 論文標題 TABOO OF FAITHS AND HOUSE SPACE	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 2227 ~ 2234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.2227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水 郁郎	4. 巻 84
2. 論文標題 藤木庸介編 『住まいが伝える世界のくらし 今日の居住文化誌』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 210 ~ 213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.84.2_210	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ABE Takuya、SHIMIZU Ikuro	4. 巻 84
2. 論文標題 ILLEGAL CONSTRUCTION PRACTICES ON ALLEY SPACE	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 753 ~ 761
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.753	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 清水郁郎
2. 発表標題 文化化的景観から霊的景観へ 水辺集落の景観研究から
3. 学会等名 第3回景観考古学・人類学研究会景観人類学 (新学術領域研究 (研究領域提案型) 出ユーラシアの統合的人類史学 - 文明創出メカニズムの解明)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Pranom TANSUKANUN, Wittaya DAUNGTHIMA, Ikuro SHIMIZU
2. 発表標題 Stronger together: The cultural landscape sustainability through the social bonds of the Mae Chaem Muang Fai system
3. 学会等名 14th International Conference on Thai Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Patiphol YODSURANG, Yasufumi UEKITA, Ikuro SHIMIZU
2. 発表標題 The Changing of Flood and Flow: River flow changing and the loss of resilient-ability in Ayutthaya, Thailand
3. 学会等名 14th International Conference on Thai Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ikuro SHIMIZU, Yasufumi UEKITA, Phisith SIHALARTH
2. 発表標題 Transformation and habituation of cultural landscapes due to changes in livelihoods Case study at the waterfront village of Lue in Luang Prabang, Laos
3. 学会等名 14th International Conference on Thai Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Marie NAKAMURA, Ikuro SHIMIZU, Sitthixai INSISIENGMAY
2. 発表標題 An anthropological study of the Phi Pop purification rites and cultural landscape of a waterfront village in Southern Laos
3. 学会等名 14th International Conference on Thai Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 魏嵩・清水郁郎
2. 発表標題 中国の文化的景観の変化とその保全 上海市嘉定区における南翔古鎮を事例として
3. 学会等名 日本建築学会 『2022年度大会学術講演梗概集（北海道）』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤由衣・清水郁郎
2. 発表標題 アイヌの文化的景観の可能性に関する研究 その1 儀礼空間及び精神性を踏まえて
3. 学会等名 日本建築学会 『2022年度大会学術講演梗概集（北海道）』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三角桂・清水郁郎
2. 発表標題 アイヌの文化的景観の可能性に関する研究 その2 居住文化と生業の変容を踏まえて
3. 学会等名 日本建築学会 『2022年度大会学術講演梗概集（北海道）』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Patiphol YODSURANG, Pranom TANSUKANUN, Wittaya DAUNGTHIMA, Phisith SIHALARTH, Sithixay INSISIENGMAY, Yasufumi UEKITA, Marie NAKAMURA, Ikuro SHIMIZU
2. 発表標題 Pau-Pop: tradition management system of the Mekong riverfront communities
3. 学会等名 ICOMOS GA2023 Scientific Symposium (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリパース・イノベーションによる発信 その7 北タイ、メーチェムの文化的景観の持続性における社会集団の関わり
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木庭袋樹・清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリパース・イノベーションによる発信 その8 -ラオス南部コーン島H村の伝統家屋の空間構成-
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤荻翔基・清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリパース・イノベーションによる発信 その9 ラオス南部シーパンドンにおける文化的景観の現状とその利用可能性
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 庄司栄介・清水郁郎・山田協太・阿部拓也
2. 発表標題 東南アジアメガシティにおけるスラムの現代的様態に関する研究 その1 最貧困層による商店経営の実態
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fei YIFENG, Ikuro SHIMIZU
2. 発表標題 Preliminary Research on Vernacular Architecture of Rgyalrong Tibetans in Danba
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 赤荻翔基・清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリバース・イノベーションによる発信 その4 ラオス南部シーバンドンにおける文化的景観の現状とその利用可能性
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリバース・イノベーションによる発信 その3 アユタヤにおける文化的景観の保存と再生に向けた保存対象の提案
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部拓也・山田協太・清水郁郎
2. 発表標題 持続性とレジリエンス概念によるスラムパラダイムの変革とクリアランス方法の開発 その1 - 家屋の違法増築および火災からの家屋再建の類似性 -
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田陸央・清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリバース・イノベーションによる発信 その6 タイ・アユタヤの水辺集落における文化的景観の利用可能性
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川海人・清水郁郎・上北恭史
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリバース・イノベーションによる発信 その5 -チェンマイにおける水辺集落の文化的景観の変化とその利用可能性-
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Patiphol YODSURANG, Ikuro SHIMIZU et al.
2. 発表標題 Cultural Landscape of the Riverfront Community Complex: Reconsidering Boundary and Setting of Water-based Cultural Landscapes
3. 学会等名 International Research Forum: Science, Technology and Innovation for Sustainable Development (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikuro SHIMIZU, Yasufumi UEKITA, Marie NAKAMURA et al.
2. 発表標題 Cultural Landscape in the Current Context: Case of Waterfront Village, Lao PDR.
3. 学会等名 International Research Forum: Science, Technology and Innovation for Sustainable Development (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Wittaya DAUNGTHIMA, Ikuro SHIMIZU et al.
2. 発表標題 Living with Floods: Moving Towards Resilient Local Level Adaptation in Cultural Landscape at Ban Khom, Ayutthaya, Thailand
3. 学会等名 International Research Forum: Science, Technology and Innovation for Sustainable Development (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北浦由樹・清水郁郎・上北恭史・Kladpan Thong-ek・吉田英志
2. 発表標題 東南アジア水辺集落の居住文化・景観の再生とリバース・イノベーションによる発信 その1 中部タイ アユタヤ県K村を事例とした伝統的家屋の様態
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kladpan Thong-ek, Shimizu Ikuro, Uekita Yasufumi, Yoshida Hideshi, Kitaura Yuki
2. 発表標題 Regeneration of Dwelling Culture and Cultural Landscape of the Waterfront Village in Southeast Asia and Dissemination of the Method through Reverse Innovation, Part 2 An Initial Research of a Waterfront Village in Central Thailand
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田英志・北浦由樹・Kladpan Thong-Ek・清水郁郎
2. 発表標題 仮設空間と居場所形成に関する研究 タイ・チェンマイ市街地の仮設空間による広場様態の変化
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 清水郁郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 300
3. 書名 河合洋尚・松本雄一・山本睦（編）「（仮）いまなぜ景観か？ 考古学と文化人類学からのアプローチ」	

1. 著者名 Soichi Hata, Ikuro Shimizu	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ARCHI-DEPOT Corporation	5. 総ページ数 113
3. 書名 Green, Green and Tropical: Woodified Architecture in Southeast Asia (English Edition), Kindle version	

1. 著者名 布野修司・清水郁郎他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 972
3. 書名 世界都市史事典	

1. 著者名 Ikuro SHIMIZU et.al.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 577
3. 書名 Sustainable Houses and Living in the Hot-Humid Climates of Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

芝浦工業大学建築学部建築学科住環境計画研究室
<https://www.arch.shibaura-it.ac.jp/shimizu-lab>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上北 恭史 (UEKITA YASUFUMI) (00232736)	筑波大学・芸術系・教授 (12102)	
研究分担者	中村 真里絵 (NAKAMURA MARIE) (20647424)	愛知淑徳大学・交流文化学部・助教 (33921)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ヨードスラン パティボン (Yodsurang Patiphol)		
研究協力者	タンスカヌン プラノム (Tansukanan Pranom)		
研究協力者	デュアンティマ ウィタヤー (Duangthima Wittaya)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	シハラート ピシット (Sihalarth Phisith)		
研究協力者	インシエンマイ シッティサイ (Insisiengmay Sithixay)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ラオス	ラオス国立大学			
タイ	カセサート大学	チェンマイ大学	メージョー大学	
ラオス	ラオス情報文化省			